

優秀賞 徳島県 中上 安妃子 様（50代 女性）

結婚してからずっと専業主婦の81歳になる母が、

「私、20歳まで3～4年位の間、工場で働いていた。」

と、急に言い出したのは『消えた年金』問題がテレビや新聞を賑わし始めてから少し時がたってからのことでした。しかし、60年以上も前のことで、しかも「三本松という地にある紡績工場」と言うことしか手がかりはありませんでした。

インターネットで調べて、何とか〇〇紡績だと見当をつけ、藁をもつかむ思いでその会社の本社に問い合わせました。するとその会社は戦後間もない頃のことを親切に調べてくれ、資料まで送ってくれました。私と母はそれを持って当地の社会保険事務所へ出向き、調査を依頼しました。期待と不安の入り交じった何ヶ月かが過ぎ、旧姓のまま眠っていた母の年金記録が見つかりました。担当の方への感謝はもちろんですが、60年以上も前に厚生年金に加入してくれていた会社にも驚きでした。

とにもかくにも消えた年金騒動のおかげで母は厚生年金を受給することができるようになりました。その上、忘れていた期間のすべての年金を2回に分けて受給できたのです。母にとっては本当にうれしいサプライズでした。

ところで、専業主婦の母は国民年金も受給しています。しかも最初から付加保険料を払っていたので基礎年金も一般の国民年金受給者よりは少し多く受給しています。私は30年くらい前に、父に「以前はサラリーマンの妻は国民年金に加入しなくてもよかったのに何故、母は付加保険料まで払っているのか。」と尋ねたことがありました。父の答えは「国のしていることだから、間違ったことはしないだろう。悪くても払った分くらいは戻ってくるだろうと思って掛けている。」ということでした。私は今更ながら、父の考えに間違いがなかったことに感心する思いでいっぱいです。

そういえば、亡くなった祖母も年金を受給していました。払う余裕のない姑のために両親は苦しい家計をやりくりして掛け金を支払ったそうです。祖母が年金

を受給できるようになってから父は祖母に対して「年金をもらえるのは、今、年金の掛金を支払ってくれる人がいるからもらえるんだ。自分に給付された年金だから、自分が使うのは当然だなどと思わずに、感謝の気持ちを持って年金を使うように。」ということを再々言っていました。祖母も年金のおかげで生活費はともかく、小遣いには不自由しなかったと思います。

現在、私の父母はそれぞれ年金を受給しており、経済面では子の援助を必要とせずに暮らすことができています。今後、年金受給額は毎年減額されていくだろうと言われていますが、私は年金の掛金を納付することが年金制度を維持する根幹だと考えて納付しています。私は18歳から、夫は22歳から納付してきました。そして今日、親の責務として、2人の娘のために国民年金に付加保険料を加えた額を納付しています。娘たちに親として、してやれる愛情のひとつだと考えてがんばって納付しています。

今日、「年金制度の崩壊」というような新聞記事・テレビ番組などがしばしば見受けられますが、不安をあおることより、年金未納率を下げ、年金制度を維持できる道を探してほしいです。私たちが納付してきた年金原資が無駄に消えてしまわないようにするための堅実な施策を心から望んでいます。

なんだかんだ言っても私は国の年金制度を信じています。だから年金の掛金も払い続けています。そしてこれからも払っていきたいと考えています。